

# 四條宮下野集

本文及び総索引



本  
文  
編



【序】

めでたくをかしき事どもを、見てのみ止むが飽かずおぼえしかば、いと事ゆかずあやしう物に書きつけてありしを、たびたびの火に失せにしかば、後々は、年積り、もの憂くなりて止みぬるに、「越えずは後の」とおぼしたる人の、「思ひ出でて書きつけよ」とあるに催されて書きつくれば、人の御をかしかりし事どもは忘れ果てて、わがあやしき事どものみおぼえて、ほのぼの、それも片端ばかり、ひが事多くや。

【一】

常よりも花おもしろかりし春、清涼殿御階の左右に、いみじく咲きたる桜の枝を、木の高さばかりにて植ゑさせ給へるを、宮の御方の戸口にて人々見るほどに、渡らせおはしまして、月の明かきほどに帰り渡らせおはしますとて、「花見せむ」と召せば、小中将・小少将など具して参る。上の女房、少将の内侍・式部の命婦など、みな花の下に侍ふに、折らせおはしまして賜はするまに、「遅し」と仰せられしかば、思ひあへず、疾きを面隠しにて、

1 長き夜ながの月の光ひかりのなかりせば雲居くもゐの花をいかで折らまし  
金春

驚かせおはしまして、「いみじうをかし」と仰せられて、うち誦せさせ  
おはしましつゝ、「返しわろくしては笑はれなむ」など仰せられて、誦  
じつゝ歩かせおはします御有様こそめでたく、その折おぼえしをかしさ  
こそ忘れがたう。

【二】

注 「せそんじ（世尊寺）」の誤まりか。

殿の御宿直所より、人々あまた来て、「花見へまかるに、案内申さでは  
いかでか」とて行きしかば、せうんじへ、と聞きてやりし、

2 もろともに立ちも出でねば春霞花の上こそ聞かまほしけれ

返し、大学の頭実綱ぞすべき、と聞きしかど、但馬俊綱の手にて、

3 常よりも咲き乱れたる山里の花の上をばいかか語らむ

【三】

但馬俊綱、「御局に参れど、隠れさせ給ふ」とあれば、参りてまだ新し

き心地せしほどにや、

4 あだ波の立ちは寄れども浦馴れぬ海人は深さを知らぬなりけり

返し、俊綱、

5 吹く風に立つことやすきあだ波も浅き浦には寄するものかは

【四】

「思はむ」など契りしに、色変はる事のありしを、訪はざりしかば、  
6 言の葉のまことなりせば藤衣涙のかかる折ぞ訪はまし

返し、少将内侍、

〔歌 欠〕

【五】

「人ごとに花を恋ふ」といふ題を、人に代はりて、  
7 人ごとに花の上こそ問はれぬれ我よりさきに見てや帰ると

【六】

小民部、「扇に手習して」と言ふに、歌絵と見ゆるは、「笹分け衣は破  
れぬ」と童のうたふ歌を書きたる」と言ひしかば、  
8 布晒すこれや相模の市ならむ笹分け衣脱ぎもかへばや

【七】

亡くなりし人に、人の、書を借りたりし、ほど経て返しおこすとて、  
書の数書きついたりける文を添へておこせたりしが、昔ながらの手にて  
ありしかば、

9 「書<sup>かき</sup>返さずは」に「踏<sup>ふみ</sup>み」を、「あとはかなし」に「跡<sup>あと</sup>」を懸ける。

10 副詞の「つゆ」に「露<sup>つゆ</sup>」を懸ける。

11 「言<sup>こと</sup>の葉<sup>は</sup>」に「葉<sup>は</sup>」を懸ける。

9 見<sup>み</sup>ましやはふみ返さずは浜<sup>はま</sup>千鳥<sup>ちどり</sup>あとはかもなくなくなる昔<sup>むかし</sup>を

【八】

少納言<sup>せうなご</sup>清房<sup>きよふさ</sup>、新少納言<sup>しんせうなご</sup>のもとに、萩<sup>はぎ</sup>の葉<sup>は</sup>につけて、いかにぞや言<sup>い</sup>ひたりし、「これ、いかに言<sup>い</sup>はむ」とありしかば、

10 川風<sup>かはかぜ</sup>にそよとばかりは答<sup>こた</sup>ふとも萩<sup>はぎ</sup>の上<sup>うへ</sup>葉<sup>は</sup>はつゆもなびかじ  
五才<sup>ごさい</sup>

【九】

侍<sup>さむらい</sup>に、人々<sup>ひと</sup>歌<sup>うた</sup>よみしに、露<sup>つゆ</sup>を恋<sup>こひ</sup>によそへて、人<sup>ひと</sup>に代<sup>か</sup>はりて、  
11 白露<sup>しろつゆ</sup>に移<sup>うつ</sup>りやはする恋<sup>こひ</sup>すとて言<sup>こと</sup>の葉<sup>は</sup>にのみかかる涙<sup>なみだ</sup>は

【一〇】

後撰<sup>こうせん</sup>の上下<sup>じやうげ</sup>巻<sup>まき</sup>、因幡<sup>いんぱん</sup>の君<sup>きみ</sup>、ふたり、書<sup>か</sup>かせせおはしますに、硯<sup>すずり</sup>に菊<sup>きく</sup>の花<sup>はな</sup>を入れ給<sup>たま</sup>へるを、書<sup>か</sup>き書<sup>か</sup>きても憂<sup>うれ</sup>くなるほどに、花<sup>はな</sup>を取りて見<sup>み</sup>れば、  
「そのけしきは、見<sup>み</sup>ぬか」と御前<sup>ごぜん</sup>の仰<sup>おほ</sup>せ言<sup>こと</sup>あれば、「あな恐<sup>おそ</sup>ろし」とて  
立<sup>た</sup>ちておこせ給<sup>たま</sup>へる、因幡<sup>いんぱん</sup>、

12 言<sup>い</sup>ひかけば世<sup>よ</sup>にも生<sup>い</sup>けらし水<sup>みづ</sup>の面<sup>おも</sup>のうたかたをだに知<sup>し</sup>らぬ身<sup>み</sup>なれば

返<sup>かへ</sup>し、

13 浅<sup>あさ</sup>きには言<sup>い</sup>ひやはかくる水<sup>みづ</sup>の面<sup>おも</sup>のけしきはかりに騒<sup>さわ</sup>ぐ波<sup>なみ</sup>かな



【二】

14 敦家の少将、煩ふことありて、内裏にも久しう参らで言はれたる、  
六〇

15 霜枯るる草の葉につけいとどしく心細さを添ふる秋かな

返し、

16 霜枯るとかけても言へば刈萱の聞く人さへぞ思ひ乱るる

【三】

宮の内侍、薫物おこせ給ふとて、

17 かばかりの思ひとや見む薫物のこは片端の心とをしれ

返し

18 うれしさを思ひ知るにも薫物の煙ばかりも身にぞしみぬる  
六〇

【三】

陸奥といふ人参りて、いみじう「頼む」などありしに、玉川とて童のあ

るが見ゆるに、

19 玉川に影見てしよりみちのくのしのぶの里ぞ苦しかりける

返し

20 下野の八島の煙ならぬにはかかる思ひをえやは知らする

16 「かはかり」に「香」、「思ひ」  
に「火」、「こは」に「籠」を  
懸ける。

18 「玉川」「みちのく」に人名を  
懸け、「しのぶ」は「信夫の里」  
と「忍ぶ」の懸詞。

19 「下野」に人名を懸け、「思ひ」  
に「火」をこめる。

【四】

五節ごせつの中の夜なかよ、月の明あかきに、局つぼねに人々あまた来て、所ところもなくゐて物語ものがたりなどするに、為仲なめなか、所のなれば土つちに立ちたり。鎮魂ちんこんの祭まつりに、内侍ないしの出いで給たまふ待まつとてあるほどに、ゐたる人にさし寄りて言いふ、

20 月こそ豊とよの明あかりなりけれ

外との人々ついで、「かかること侍きよらふ」と告つぐれば、「行いかぬさきに」と思おもひもあへず、

21 日影ひかげにもさしまさりけり雲くもの上うへは

21 「日影」に「日陰（葛）」を懸けける。

と言いひ出いでたるを、かしがましく誦ずじののしりて、立ちて、塀へいの外とに人ひとあるに、信房のぶふさ、ものを忍しのびやかに言いへば、「何事なにことぞ」と寄りて立たち聞きけば、「これは何事なにことのいみじきぞ」と問とへば、「豊とよの明あかりには日陰ひかげといふ事ことあり」、月日つきひなど有様ありさまを言いひ聞きかするなりけり。さ言いはれて、心得えて、「げにげに」と言いひしを聞ききしこそをかしう。

八才

【五】

ある上達部かんだちめ、雪ゆきの降ふる日ひ参まゐり給たまひて、帰かへりてのたまへる、  
22 思おもひ知しる人ひともあらじを降ふる雪ゆきに消きえかへりつつ恋こひをするかな

23 「ふる」が「経る」と「降る」の懸詞。「しら雪」に「知ら(す)」をこめる。

返し、

【二六】

甘海苔といふものを、あまのり 厄なるはらからにやるとて、

24 「すくふ」は「掬ふ」と「救ふ」の懸詞。「あまのり」に「海人あま」と「法のり」を、「わたつみ」に「罪」をこめる。

24 すくふべきあまのりをこそ尋ねつれわたつみ深き身にはと思へば  
八二

返し、

25 「海人あま」に「厄」を、「乗り得たる」に「海苔のり」ならびに「法のり」をこめる。また「すくは」は「掬は」と「救は」の懸詞。「わたのはらから」は「わたのはら」と「はらから」。

25 あま舟にわれのり得たるしにはすくはざらめやわたのはらから

【二七】

例ならぬ事ありて里にあるに、夜中はかりに門をおどろおどろしう叩きて、「二位中将殿より御文」と言ふに、驚きて見れば、雪降りて月いと明かし。

て、「二位中将殿より御文」と言ふに、驚きて見れば、雪降りて月いと明かし。

10

26 白妙しろたへの雪ゆきを月とぞ紛まがふめる共ともなる今宵何こよひなにに譬たとへむ

返し、  
九才

〔歌 欠〕

【二八】

馬うまの頭師基かみもろもと、「殿へ召すにだに参らぬもの見せむ」とて、祖父おほぢの入道にふだうの

15

5

27 「思ひ染めたる」に「緋」を、  
「言の葉」に「葉」をこめる。

注 「いはまかた」、意不明。ある  
いは「今はまた」の誤まりか。  
28 「言の葉」に「葉」をこめる。

注 「給はず」の「ず」脱ならん。  
29 「いる」は「入る」と「射る」  
の懸詞。

30 「すめる」は「住める」と「澄  
める」の懸詞。「田居」に  
「的」をこめる。

選りたる万葉集の秋の巻のみおこせ給ひて、「残り後は」にて、かく、  
27 秋深く思ひ染めたる言の葉をあだなる風に散らさざらなむ  
返し、  
九ウ

注 28 いはまかた春の花こそゆかしけれ秋の言の葉見るにつけても

【九】

月の明かき夜、上渡らせおはしましたる御供、内侍・命婦・殿上人々侍  
ふに、為家、「弓場殿に月の入りて侍ひつるに、かく申したりつるを、  
人々つけさせ給はなりぬる」とて、  
一〇オ

29 弓場に月のいるぞことわり

と言へば、

30 君が代のどこにすめるまゝには

と言ふ。

【一〇】

閏七月七日に、為仲、

31 たなばたの過ぎにし月のならひにはあやなく今宵ものや思ふらむ  
返し、

32 たなばたの思ひ余れる月なれば名を頼むともかひやなからむ

【三】

資良、「よみ集めたる歌ども見せむ」と言ふに、「見む」と日ごろ言ふに、扇にこまかに書きたる歌を、「これ、召す歌ども」とて簾の下よりさし入れたるを、急ぎ取りて見れば、よき古歌のかぎり書きたるなりけり。「これは古歌にこそ。かく謀る」と言へば、「侍に落ちて侍ひつる。

さて、かやうによまばやおぼえて、持て参りつる。さても孔子倒れさ

「二オ」

せ給ひぬ」と、「謀られたり」と思ひて言ふに、またのつとめて、侍に侍ふを、わざと呼ばせられたれば、来たるに、人の文と見えたる、紙ひと重ねに、ただの紙、古き歌をふたつ書きて、「御匣殿の母は歌よみにおはす。それがかくして参らせ給へる、返しせよと仰せらるる、いづれよし

と見給へ」とてさし出でたれば、かく見せあはするをうれしげに思ひて、

「二ウ」

急ぎ取りて見て、「いづら、これはものも書かれぬ紙にこそ」とて、また古歌書かれたるを見て、後に、「おい、たばかりせ給ふにこそ」と言ふか。いと心疾き心地に、遅く心得て、「ほどもなくも、当に謀られ参らするかな」と言ひし、

「二オ」

33 夜もすがら心にかけていかばかり今こそ目をめやすく合はせめ  
返し、

34 曇りなく見えわたれども久方の空知らずとはこれをいふかも

【三】

煩はしき縁ある人の、文おこせつつ久しうなりぬるに、返り事もせぬに、  
大式になりて下るとて、

35 よしや言はじあり経て見てむ筑紫なる生の松原生きしめぐらば  
返し、

36 苦しきに思ひながらぞ遙かなる心つくしにいきの松原

【三】

「頼まむ」などある人に、「いとよきこと」といらふれば、

37 言の葉は恨むばかりになけれどももなほ飽かず思ほゆるかな

返し、

38 飽かずとていかかはすべきかばかりも言ふよりほかの事しなければ

【四】

東三条殿におはしますところ、「殿上人の参り給はぬひまにだに、御局に

36 「心つくしにいきの松原」は  
「心尽くし・筑紫に行き・生の  
松原」。

39 「かた」は「方」と「瀉」の懸詞。

40 「かた」、前歌と同じ。

参りてつれづれ慰めむ」とて、宮司どもの来てもの言ひ言ひての果てに、  
資良・高房が言ふ、「宮司のかたちよき宮よ」と言ひて、「されどもわ  
れはまさりたり」と争ひて、「これ、定めさせ給へ」と言ふを、「今、  
人々に語り語り来てこそ」など言ひて、この事を、人々に夜居のつれづ  
れに語れば、筑前・式部の命婦など、「高房はまさる」とあるに、資良  
が方に寄りて、互みに争ひ笑ひて、夜ふくるまで言ひ明かして、やがて  
みな御前に寝たるつとめて、たれか語りけむ、「筑前は疾くおりて下に」  
と聞きて、言ひかはしけるも知らぬにおりたれば、資良、「筑前のもと  
に、かくなむ言ひつかはしたりつる」と、「訪ひにつかはせ」とて語る。  
39 なつかしきかたには寄らで白波の荒磯をのみ好むめるかな  
返し、また返しなどありき。今思ひ出でて書かむ。  
40 荒磯の潮干のかたの方人は同じ波にやさはなりにける  
かかる事を聞きて、この、

41 荒磯は波の音さへ疎まれてかかる水屑も汀にぞ寄る

【三】

つごもりより、煩ふ事ありて参らねば、問ひにやるとて、年さへ中に言

ひやりたれば、資良、

42 常つねよりもおぼつかなきやこれやさは年としの隔へだつるしるしなりける

返し、  
一五才

43 「はるく」は「晴るく」に「春  
来」を懸ける。

43 思おもひやれ冬籠ふゆごもりにしままならばおぼつかなさぞはるくともなき

【三】

小式部こしきまろに、有網訪ありつなをとつるるころ、みな「さなむ」と人々の言いふに、かく言いひ  
たる、

44 春立はるたたばうちも解とけなで山川がはの岩間いはまのつらいとど繁しげしも

代かはりて、

45 さらぬだに岩間いはまの水は漏もるものを氷解こほりけなば名なこそ流ながれめ  
後拾ごしゅう 雑ざつ二

【三】

「梅うめの香か、夜多よるおほし」といふ題だいを、人ひとに代かはりて、  
一五才

46 色見いろみえぬ梅うめのかばかり匂にほふかな夜吹よるふく風かぜの便たふりうれしく

【三】

よしなき物語ものがたりして居明ゐあかしたる人ひとの、つとめて言いひたる、

47 そぼちぬる今朝けさは袂たもとぞなつかしき夜よるのなごりの涙なみだと思おもへば

46 「かばかり」に「香」をこめる。



返し、

48 何故に夜の涙とかけつらむ我濡衣になりもこそすれ  
「六才」

【三九】

人々「ほととぎす尋ねに」と語るに、「ここには今宵聞きつ」と言へば、  
49 今よりは宿にて聞かむほととぎす尋ねぬ人ぞまづは聞きける

返し、

50 宿にても寝ぬにこそ聞けほととぎす夢ばかりにや人の待つらむ

【四〇】

五月五日、御前より根を賜はせられたれば、

51 「よどの」は「玉の夜殿」と  
「淀野のあやめ草」。

51 たぐひなき玉のよどののあやめ草長きためしに引きてけるかな  
返し、信濃の君、  
「六才」

52 「よどの」、前歌と同じ。  
注「ね」は「ぞ」との係り結びで、  
「ぬ」とありたいところ。

52 もろともに玉のよどののあやめ草引くべき今日の数ぞ知られね  
【三一】

夜中ばかり、起きて、源式部の琴を弾くに、驚きて聞くほどに、ほとと  
ぎすの鳴けば、

53 「こと」は「事」と「琴」。

53 さ夜ふけていかで聞かましほととぎすひき驚かすことなかりせば

注 「伊勢」は女房名か。

「殿の聞かせ給ひて仰せられける事申さむ」とて、人々のよろこび言ひに集まりしさまこそ、司賜はりたらむ心地せしか。その折の心地は、それによさうてこそおぼえしか。  
一七〇

【三】

54 かねてより絶ゆばかりなる池水は浅しや何か言ひもかくべき  
「思ひ絶えなむ」と言ひたる人に、

【三】

同じ人の、伊勢の局になむ入りたりける、と聞きて、たれともなくてさし置かず、

55 「伊勢の海」に人名を懸けているか。

「かひなき」は「甲斐無き」と「貝無き」。

56 「うきみの浦」不明。「憂き身」を懸けているのであろう。  
「かた」は「方」と「潟」の懸詞。

55 伊勢の海のかひなき浦に寄せてけり定めなかりし海人の釣舟  
一七二

返し、

56 波高きうきみの浦の海松布していづれのかたの貝か拾はむ

【三】

「御前に申さすべきことあり」とある人に、さし出でたるに、さし過ぎたるけしきのしければ、「懲りぬ」とて入りたるつとめて、

57 まだ知らぬ心の誘ふたびなれば峰の懸け路もいかとぞ思ふ

58 試みし峰の懸け路の危ふさに踏み馴れけるも疎ましきかな  
返し、  
「八才」

【五】

七月七日の御衣のこと申したる文に、「瘡に煩ひて衣を着侍はぬ」と  
書きたる文の文字どもを、さながら書きなしてやる、  
59 今日なれど天の羽衣着られねば渡りわづらふかささぎの橋  
返し、為仲、  
「八才」

59 「渡りわづらふ」に「煩ふ」を、  
「かささぎの橋」に「瘡」をこめ  
る。  
60 「かささぎの橋」に「瘡」をこめ、  
「きぬ」は「来ぬ」と「着  
ぬ」の懸詞。

【三六】

60 かささぎの橋の板間にと絶えて立ち出でてきぬぞ唐衣なる  
例ならぬ事ありて、少し立ち離れたる所へ往にし人の、十二月二日に、  
「おぼつかなきこと」など言ひたるに、

61 「ふる」は「経る」と「降る」  
の懸詞。

【三七】

61 思ひやれ秋見し人の冬なれば時雨のみしてほどのふるをも

62 「吹き寄る」と「夜ごと」に、  
「松虫」と「待つ」が懸詞。

里にあるころ、月の明かきに、宮より信濃のたまへる、「かく月の明  
かきにも、まことになむ待たせおはします」とて、  
62 秋風の吹きよるごとに刈萱の下に乱るまつ虫の声  
「九才」

63 「松虫」に「待つ」、副詞の「つゆ」に「露」を懸ける。

いとをかしきに、手もをかしげにぞ書き給へる。御返し、  
63 まつ虫と聞くにつけても宮城野につゆも心をかけぬ日ぞなき

【三六】

左の馬の頭経信の六条に、宮の女房達具して行きたりしに、あるじもなきに、土佐の開けさせて、みなおりて見れば、いと遙かに水の流れて、  
垣根ばかりぞ見ゆるまに、扇の端を折りて、唐めきたる硯の箱のあるに、見ゆまじくして、

64 「すむ」は「住む」と「澄む」。

64 遙かなる霜枯れの野にすむ水は垣根を宿のあるじとや見る

ほど経て見つけて、経信、

注 一字分不明。「経信集」には「みぎは」とある。

65 垣根をば占めやはしたる遙かなる□ぎは眺めに来る人のため  
【三六】

雪降る日、「人通ふらむ」など言ひたる人に代はりて、

66 跡もなく降り積む雪に見えぬらむ人も通はぬ宿のけしきは

【三六】

正月七日、雪の降りたるに、為仲、

67 春日野に雪間かき分け常よりも今朝の若菜をいかで摘むらむ

68 「降りつむ」は「降り積む」に「摘む」を懸ける。

返し、

68 若菜にと野辺にも出でじ今日はただ降りつむ雪にまかせてを見む  
二〇二

【四】

69 「ふる」は「降る」と「経る」。

69 美濃の君、日ごろ待ひ給ひしが思ひ出でられて、雪の降る日、  
下氷解くる待つ間の恋しきに今日まで雪のふる空ぞなき

返し、

70 「ふる」、前歌と同じ。

70 思ひ出でてふる雪だにもあるものを氷解くらむほどや久しき

【四】

宮の歌合、世にののしりて、日記あることなれば、これは書かず。秋の  
方人にて、それが方の上達部・殿上人など、「ただわがためのことぞ。  
二〇一  
よむべきたびぞ」などあれど、この事定め騒ぐに、いとど紛れてよまれ  
ず。言ひ試みし事ども、住吉詣での所、

72 「まつ」は「松」に副詞の「ま

71 君にのみあまたの千代を譲るかな岸にひまなき住吉の松  
72 祈り来る三千代のほどは住吉の岸のしるしにまつぞそ見えける  
注 如本

「つ」を懸ける。  
注 原本にも「如本」とあるが、  
「そ」は一字衍ならん。

月の池水に映れる所、  
二二〇

73 近くても空なる月を見つるかな映れる水に影を並べて

萩、

74 露繁つゆしげき小萩こはぎが原はらに立ち寄よれば花摺はなずり衣着ぎらもきぬ人ぞなき

菊、

75 ひとともに咲さく白菊しらぎくの移うつろへば千種ちぐさの花はなの色いろになるかな

鹿、

76 我泣われなきて何なにを恋こふらむ鹿しかの音ねぞ秋あきの山辺やまべの妻つまと聞きこゆる

山田、

77 里遠さとほみ人目ひとめ稀まれなる小山田やまだは稲葉いなばの露つゆのものにぞありける

駒迎へ、

78 牽ひく駒こまの数かずよりほかに見みえつるは関せきの清水しみづの影かげにぞありける

雁、

79 かりがねの空そらに文書ふみかくたまづさは雲くものよそなる人さへぞ見る

方人かたの民部卿みんぶのもとにて選えられしに、方人かたの人々集あつまりて、宮みやの亮師基すけもろと、

「御歌うたみ三つ入いりぬ」と告つげおこせ給たまへりしほどに、女院にういんより「これを」

と仰おほせられたるとて、「伊勢大輔いせたいふがにふたつは代かへられぬ」と口惜くちをしが

り給たまひしこそ、その折をりうれはしかりしか。

77 「もる」は「漏る」と「守る」の懸詞。

80 「みぎは」に「右」をこめる。  
「あやめ」は「文目」と「菖蒲」  
の縣詞。

【三】

五月五日、あなた方の大夫隆国のもとへさし置かす、

80 今日さへや淀のみぎはのかひもなくあやめも知らぬ人のためには  
「三〇」

【四】

院の中將、「『おもしろき所見せむ』と大進の君誘ひて見せよ」とのたま  
ひて、

81 もみぢ葉の散らぬさきにと誘はむに見じといふなる人はあらじを

返し、「かくとこそは思ふらめ」とて、

82 もみぢ葉はあだなるものと知りながら心と見てや散るを嘆かむ

【五】

十月つごもり方に、宇治に女房達・殿上人などあまたものして、「残り  
「三二」  
のもみぢ尋ぬ」といふ題をよみののしりて、内に入れたれば、女房達よ

まれしに、

83 心して風の残せるもみぢ葉を尋ぬる山の峽に見るかな

富家殿に渡るに、網代の前過ぐるほどの宇治川の早さ、波にもて騒がれ  
て、舟いと心慌しきに、殿上人の舟少し漕ぎ寄せて、  
「四〇」

84 網代に寄らぬ今日にもあるかな

頭家の少将の声して言ひかくるまに、舟波につきて退けば、退かぬさきにとて、

85 「日をば」に「氷魚のき」をこめる。

85 円居して日をば暮らせど宇治川の

【四六】

侍に、さるべき人々、所々の名に霧を寄せて、「これ、つれづれの目ざましに侍ふ」とておこせたれば、上にこの題を持てのぼりて、人々によませ聞こえて、取り集むれば、内の御前、「歌の知識か」とて笑はせおはします。長柄の橋の霧、信濃、

86 跡をだに見るべきものを古への長柄の橋を籠むる秋霧

信田の森の霧、

87 霧籠めて千枝の繁さも分かれねば秋は信田の森ぞかひなき

異人々のおぼえず。

【四七】

九月九日、菊を、「これはいかにするものぞ」とておこせたれば、若様におぼゆる人なれば、



88 年積みて折ぞ知りぬることさらに若ゆる菊の露のかかれば

【四八】

雪のいたく積りたるに、馬の頭師基、

89 九重に降り積む雪を眺めても吉野の山を思ひこそやれ  
返し、  
二五〇

90 雪積る吉野の山は高くとも雲居に映るいかがまさらむ

【四九】

美濃の君の多田へ下りし、扇賜はるとて、

91 「あふぎ」に「逢ふ」をこめ、  
「住吉」に「住み良し」の意を  
こめる。

92 「住吉」、「あふぎ」、前歌と同  
じ。

91 待つ人にあふぎと思はば津の国の住吉の名に心とどむな  
返し、

92 住吉の名にいかばかりほども経じあふぎの風になびく心は

【五〇】

注 一字分不明。あるいは「も」  
か。

宇治殿にはじめおはせぬ人々出で立つに、「このたび□行け」と仰せら  
るれば、大納言殿など具せさせ給へり。富家殿にぞ参り着きたる。おも  
しろく、新しく、御障子の歌あるべき殿なれば、まだしきに「歌あるべ  
し」とて。殿上人々よまねば、まいて珍しげなき人は、とて思ひもかけ

93 「なきさ」は「無き」と「渚」の懸詞。「うちやましくも」に「浦」をこめる。

94 「かりそめに」は「仮初めに」と「刈り初め」を懸ける。

96 「うち山」は「身の憂」と「宇治山」を懸ける。  
注「あきれれめこそ」意不明。

で、新しく見給ふ筑前よまむ、うちうちには「などてか」とよままほし  
げに思はれたる、ことわりに譲りて見れば、殿上人々舟に乗りて遊び帰  
るに、筑前、  
二六ウ

93 曳く人もなきさの舟もあるものをうらやましくも漕ぎわたるかな

頭家の少将のありしかど、忘れて。大納言殿、御前の田刈らせて見せさ  
せ給ふに、穂に出でたるを折りて賜はせたるに、書きつく、  
二七オ

94 かりそめに見てのみなとか帰るらむ山田の稲は年をこそ積み

取り出でさせ給ひて、人々の見けるにや、経信の、ゐたる方に尋ね来て、  
「これぞ歌、なほ古人こそ」など、ことさらび笑はるる言葉どもあり。

宇治にとまりし人の言ひたる、

95 澄みながらふけ行く月は頼まれず身を離れける影と思へば

返し、  
二七ウ

96 月影を待つ人もなき秋の夜に身のうち山を出でずやあらまし

「この歌を殿上にて聞きて、『この事聞きつけてこそ、思はずに、あきれ  
れめこそ、大きになりたりつれ』と、津の守師家のたまひて、返しを伝  
びまどひてしたり」などあるに、恥づかしくて、「悪しう心得給へるな

らむ」とていらふる、

97 心にもあらぬ憂き世を嘆くをば思はぬ方に言ひやなすべき  
「さては哀れなり」などあり。

【五】

大納言殿、白河殿に誘はせ給へば、信濃・土佐、二三人ばかり参る。それより北に、白河に、山川の早う流れたる中に、車を立てて、御供の人具して、水に下り立ちて、山の上にのぼらせ給ふ。山の上を見上げたれば、あるかなきかのけしきしたる遺戸、細く開きたり。「たれが住むならむ」と哀れに見るに、「中納言の宣旨といひし人の住むなりけり」と告げさせ給ふ。

98 「すむ」は「澄む」と「住む」の懸詞。

注 二・三字分不明。

98 尋ねつる山川水の早くよりすむらむ人の心をぞ汲む  
と言ふを聞きて、「言ひやらむ」とて、為仲書きてやるべし。中納言の君、返し、よししげ  
99 来る人もなき山里は峰の風滝の音をぞ慰めにする

【三】

雪のいみじく高く降りたる日、上、南殿の雪御覽じに出でさせおはしま

101 「ふるく」は「降る」と「古く」  
の懸詞。

102 「わかな」は「若菜」に「我が  
名」を、「ふりぬれば」は「降  
りぬれば」に「旧りぬれば」を  
懸ける。「忍草」には「忍ぶ」  
意をこめる。

して、やがてこの御方に渡らせおはしまして、御供に殿上人々あまた侍  
ふ。西の戸口に、土佐とふたり、御供の人々に物語して出でゐるたるに、  
帰らせおはしますとて、「あの薄の雪落とさで折りて」と召せば、権亮  
頭家折りて持参りたり。「それに取らせよ」と指して仰せらるれば、  
戸口の御簾の下よりさし入るれば、取るままに、  
100 雪降れば咲かぬ枝なく見ゆれども折からまざる花薄かな

【五】

人のたまへる、  
三〇才  
101 若菜摘む袖にかかれる沫雪のふるく誘ひし人ぞ恋しき  
返し、

102 袖かけしわかなは雪のふりぬれば忍草をぞ形見には摘む

【五】

去年の冬、津の国へ下りし美濃の君の、「春のぼるべし」とありしかば、  
難波なる芦間の氷春立てば解くべきほどになるぞうれしき  
三〇才

【五】

内裏より夜まかでて清水に詣でたるに、傍の局に、ただ今まで宮に侍ひ

104 「清水」に寺の名を懸ける。

つる為仲<sup>ためなか</sup>が行<sup>おこな</sup>ひしてある。「かく詣<sup>まう</sup>でたり、と思ひかけじかし」とて、  
もろともに詣<sup>まう</sup>で給<sup>たま</sup>へる人の、「昔<sup>むかし</sup>見<sup>み</sup>ける人<sup>ひと</sup>などの詣<sup>まう</sup>であへると思<sup>おも</sup>はせて  
謀<sup>はか</sup>らむ」など言<sup>い</sup>ひて、人<sup>おほ</sup>の多<sup>まう</sup>く詣<sup>まう</sup>で騒<sup>さわ</sup>がしきに、書<sup>か</sup>く所<sup>ところ</sup>もおぼえず暗<sup>くら</sup>  
きに、硯<sup>すずりもと</sup>求<sup>もと</sup>めて、あやしき人<sup>ひと</sup>して、「京<sup>きやう</sup>より」とてやる。急<sup>いそ</sup>ぎ、出<sup>い</sup>でて  
見<sup>み</sup>るなり。「あやし、あやし」とたびたび言<sup>い</sup>ふなり。

104 清水<sup>きよみづ</sup>の騒<sup>さわ</sup>ぐに影<sup>かげ</sup>は見<sup>み</sup>えねども昔<sup>むかし</sup>に似<sup>に</sup>たる滝<sup>たき</sup>の音<sup>おと</sup>かな

宮<sup>みや</sup>に参<sup>まゐ</sup>りたるに、「清水<sup>きよみづ</sup>に詣<sup>まう</sup>でたりしに、いみじき事<sup>こと</sup>こそ待<sup>まち</sup>へ」とて語<sup>かた</sup>  
るを、人<sup>うへ</sup>の上<sup>うへ</sup>になして聞<sup>き</sup>くがをかしけれど、けしきにも出<sup>い</sup>ださで、まこ  
三二〇  
とにをかしがる。「さるにても、たれとかおぼえ給<sup>たま</sup>ふ」と言<sup>い</sup>へば、「そ

れならむと思<sup>おも</sup>ふ人<sup>ひと</sup>のがり、返<sup>へ</sup>り事<sup>こと</sup>はつかはしてき」と語<sup>かた</sup>る。

105 滝<sup>たき</sup>の音<sup>おと</sup>も昔<sup>むかし</sup>聞<sup>き</sup>きしに変<sup>か</sup>はらずは流<sup>なが</sup>れて絶<sup>た</sup>えぬ心<sup>こころ</sup>とを知<sup>し</sup>れ

たれ待<sup>まち</sup>ち得<sup>え</sup>て、心得<sup>こころえ</sup>ず、と思<sup>おも</sup>ふらむ、とをかし。「返<sup>へ</sup>り事<sup>こと</sup>やあ□」と問<sup>と</sup>  
三二〇  
へば、「侍<sup>さむら</sup>ひしかど、心得<sup>こころえ</sup>ず」と言<sup>い</sup>ふこそことわりなれ。

【五六】

隆<sup>たか</sup>方<sup>かた</sup>、月<sup>つき</sup>の明<sup>あ</sup>かき夜<sup>よ</sup>、局<sup>つね</sup>に來<sup>き</sup>たりしに、「御<sup>お</sup>前<sup>まへ</sup>に。暇<sup>いとま</sup>ふたがる」と言<sup>い</sup>は  
せたりしつとめて、

注 一字分不明。「る」であらう。

106 よしさても待たれぬ身をばおきながら月見ぬ君が名こそ惜しけれ

返し、

107 契らぬに人待つ名こそ惜しからめ月ばかりをば見ぬ夜半ぞなき  
三三ウ

【五七】

三条の中納言の上、桂におはすと聞きて、内裏よりまかでて、人々参り  
たりしに、

108 植物の「桂」に、地名の「桂」  
を懸ける。

109 「をぐら（小倉）の山」に「小  
暗」の意をこめている。

108 尋ね来て月の心に入りぬれば光異なる桂をぞ見る  
かへ 帰る道にて、小倉山にて、月の入りぬれば、信濃、

109 音に聞くをぐらの山は月影の入りぬる時の名にこそありけれ  
三三ウ

【五八】

里にあるに、八月十五夜、殿の大納言殿、夜中ばかりに女房達など具し  
て、入りて歩かせ給ひけるを、寝て、遅く見つけ奉りて、つとめて、式  
婦の命婦、

110 出でてより心空にて見る月の入るまで知らぬ宿もありけり

返し、

111 露繁き蓬の宿の光にも入り来る月の影をこそ見め  
三三ウ

と思ひて」と聞こゆ。

【五九】

萩のいみじうひろごりて咲きたるを、上より、式部の命婦、御使にて、

「萩の笠奉る」とて奉らせおはしましたるを、信濃、

112 萩の笠をば鹿や着るらむ  
三十四才

御使の式部、

113 露繁き秋の野原の朝夕に

とありけるに、急ぎて召したれば、のぼりてつくる、

114 柵めば心とかかる露により

【六〇】

大納言殿、「宮の御前の前裁、丈高し」とて笑ひ申させ給ひて、「知ら

れ参らせで、をかしげならむ、植ゑかへむ」とのたまはするを、心なら

ず、「見つけ参らせむ」とあらがひ申す。「さらに知られじ」とあらが

はせ給ふ。八月十余日、「この月のうち」と申して、夜ごとに、女房達

かはりがはり起きて見るに、ここにまぼりし夜しも、いみじうをかしき

さまに仕立てて持て参らせ給ひける。南殿の方より、夜中過ぎて、人々

のけしきして、いとしく聞きつけ参らせて見たれば、御前の壺に入る遺戸の樋に、砂を入れて、細く開けておきたるを、いと忍びて開けさせ給ふに、鳴れば、開けさし開けさしする。をかしと見たるに、開けて、人入りて、前裁持て入れむとするほどに、扇うち鳴らし、「かく見奉る」と驚かしたるに、逃げて出づる人、扇を落としてけり。外に殿の

5

御声もして、笑はせ給ふなり。忍びて扇取りに帰り入りたるは、長房の君なりけり。密かにえ植ゑえで、をかしきさまなる台ども仕立てて、あらはれて、植ゑおきて帰らせ給ふ。東面にて、中將に對面して笑ひ聞こゆ。又の日、大納言殿の参らせ給ひて、「長房が申すは、『かかる剛の者の守りける夜しも、などてしつらむ』となむ申す」など申させ給ふに、「東三条殿に参りて、知られ参らせで歩かむ」とあらがひ申す。「ありかでも、『ありきき』とあらむは」とのたまはすれば、「『参りたりけり』としるしおきて帰らむ」と申す。「まことにありき給はむに、知ら

10

ではいかでかあらむ」とのたまはせて、その夜よりも寝で、人々守らせ給ふ。「屋の上にさへ人のぼせて置かせ給へり」、「入るべき道に牛をさへ立てふたぎてなむ」とさへ、案内すれば、参り通ふ男達の語るに

15



115 「おきて」は「置きて」と「起きて」の懸詞。

116 「露」は副詞の「つゆ」と、「や」は助詞の「や」と感動詞の「や」との懸詞。

いとおどろおどろしく、十日ばかり聞けば、「いかがすべからむ」と思へど、「さてのみあらむやは」とて、鹿の形をいとをかしげに作りて、青き薄様を萩の葉に破りて、鹿に押しつけて、書きつけて、夜中ばかりに、東三条殿に参りぬ。

115 露おきてたれかは見けるさ牡鹿の柵み伏する野辺の秋萩

東の壺に向かひて住ませ給ふに、入らむとすれば、入るべき口に、まことに牛立ちたり。具したりし侍よしのりして退けさせて、具し聞こえたる若き女房達は怖ち騒ぎ給ふに、密かに入りて、萩の下にこの鹿を立ておきて、帰るとて御格子を引き見れば、守るとて懸けざりければ、引き上げられたる格子のもとに、人々十人ばかり寝たり。母屋に、殿はいとあらはに、御几帳うち上げて寝させ給へり。をかしうて、扇して端を高くかにうち叩きて、「いみじうも大殿籠りたるかな」と申しかけて、急ぎ帰りぬ。寝たる人々、寝くたれて起きあがりて騒ぐ。御返し、曙に宮の御簾にぞ差されたりし、

116 柵にいつしか来なむと思ふには萩に置きたる露やとも言はず

【六】

三九〇

117 「ゆき離れても」に「雪」をこめる。

118 「まつ」は「待つ」と「松」、「ふる」は「経る」と「降る」の懸詞。

法性寺に籠らせおはしましたりしに、久しう侍ひてまかでありしに、雪の降りしかば、

117 もろともに今日はみ山のうちならでゆき離れても思ひやるかな  
返し、資良、

118 み山には君をまつのみ繁ければ千年ふるべき雪と知らなむ

年返るまでおはしまししに、小さき松につけて、藏人の少将隆綱、  
霞立つみ山の松を君ゆゑに引くは千年のしるしなりけり

返し、

120 松引くに君ぞ知りぬるよろづ世を霞籠めたる山の景色も

### 【三】

御悩みに出でさせおはしまして、里におはしますに、「つれづれ慰めむ」

とて、「なぞなぞ語りの歌ひとつ」と中納言経成の請ひ給へば、

121 ほど過ぎて花咲くまじくなりぬれば造りてのみぞ慰めにはする

と聞こえたるを、え解き給はで、中納言、

122 春立てば谷の氷も解けぬるを岩間の水の行きやらぬかな

返し、

123 山やま隠かくれ尋たづねても見みで岩いは間まより心こころと水みづの漏もるをやは待まちつ

【六三】

四月に、心こころ細ほそきまで心地ちあ悪わるしくて、里さとにあるに、「ほととぎす待まちつ歌うたよ  
四〇二」  
まむ」と人のあれば、

124 ほととぎす待まちつより音おとこそ泣なかれぬれ越こゆべき山やまのしるべと思おもへば

【六四】

ものへ詣まうでしに、山川がはの早はやき麓ふもとに、人よ寄よるべくもなき巖いはに、蜘蛛くもの巢いか  
きたるを

125 「よらねば」は「寄らねば」と

「嵯らねば」の懸詞。

125 山川やまがはの岩いは間に巢すがくささがにの糸いとこそ絶たえね人ひとしよらねば、  
四一〇

【六五】

山やまなりしはらからの、伯は耆はきに下くだりて亡なくなりたりしに、「心こころも慰なぐさめむ」  
とて、暇いとまにて里さとにあるほど、難な波はわたりに、兼かね綱づなの中なかつな将しやうの、むすめの君きみ  
など具ぐして下くだりて、「天王寺てんわうじ詣まうでもせむ」とありしに、衣きぬの色いろ変かはへし  
ほどに、春宮じんとくの大進たいしん隆たか経つね、

126 「そのはらから」は「園原」と

「はらから」。

126 東路あづまぢのそのはらからの露つゆけさは藤ふもの衣きを着きてや捨すつらむ  
四一ウ

返し、

127 「ははきぎ（骨木）」に「伯青（ははき）」をこめる。

九月つごもり、為仲が言ひたる、

127 ははきぎにありと聞かねば東路をかくるにいとど露ぞこぼるる

128 旅寝にて日数経ぬれば過ぎて行く海人の綱手や難波なるらむ  
返し、

129 「うきね」は「浮根」に「憂き寝」。

129 難波潟芦のうきねに過ぐる夜の秋果て方を訪ふぞうれしき  
十月二日、丹波守俊綱、  
四二〇

130 神無月初時雨には難波江の波寄る芦も色やつくらむ  
返し、

131 時雨るれど色も変はらず難波江に波寄る芦の花と見ゆれば  
かくてあるほどに、宮の侍どもおぼつかながりて来たるに、  
の宿りの客人」といふ題をよむとて、  
隆経、  
「旅

132 都より旅の宿りに来る人はまづ見るよりぞうれしかりける  
やがて、北の方、  
四二二

133 うちつづきまたや結ふべき草枕旅の宿りに来たる旅人  
134 旅寝する草の枕を打ち払ひ尋ねて来たる人にこそ貸せ  
来たる者どもの多かれど書かず、  
典侍ののたまへる、

135 「住吉」に「住み良し」を懸ける。

136 「忍ぶの草」は「忍ぶ」と「忍草」。

137 「かへる」は「帰る」と「返る」。

135 ほど経るもうしろめたしや難波江に住吉といふ海人もこそあれ  
返し、  
四三才

136 住の江は海人のいさめも何ならで都忍ぶの草ぞ茂れる

「帰りて」と聞きて人々来るに、難波にも「来む」と言ひしに、人々の来しにもなかりしもとなり、音もせで、ほど経て、「帰らせ給ひてや」と問ひたりしほどに、いと薄き檀のもみちの、枝の見えし葉に書きつけてやりし、  
四三才

137 思はずにもみちの色の薄ければかへるも知らぬ反檀弓かな

【六】

初雪のつとめて、楓のもみちの色々なるに、雪のかかりたるを落とさで、  
ためなか  
為仲がおこせたる、

138 薄く濃く時雨の染めしもみち葉にいまひと色を添ふる白雪  
返し、

139 降り染めし時雨も過ぎて初雪に楓の色をたれか見せまし  
四四才

【七】

注 「そまやま（杣山）人」の誤まりか。

資良、杣や人して下りて後、人も参らせねば、便りのありしに言ひやる、

140 雪深く入りにし杣の山人は解くる跡こそかき絶えにけれ

同じ日、あれよりもおこせける、

141 杣山の谷のつららやとちつらむ岩間の水の音絶えぬなり

やがてのぼりて、侍に声すれば、向かひて言はむとて、打聞きのやうに

書いて、土佐の御もとにおこせたる歌なども、「資良、杣山より」とて、

まづあれがを書いて、「返し」とて書きたり。さて、「この打聞き見給

へ」とてやる、

142 杣山の斧の音にや紛るらむ谷の清水は氷せずとも

同じ日、あれよりもこれよりもおこせけることを聞きて、為仲、「これ、

打聞きに入り侍ひぬべしや」とて、

143 杣山の谷の水茎かきならず心や空に行き通ひてむ

返し、

144 谷川の行き交ふ心汲む人はこの山道に入りぬべきかな

# 【六】

五節近くなりて、里にまかでて、歌よむ人々に題を範永してやらせて、

清けなるほどにひきつくるひて待てば、人々来集まり、經衡人より疾く

143 「かきならず」は「書き」と  
「掻き削らす」の懸詞。

注 「かこし」、あるいは「かうし  
(庚申)」かとも思うが、意不明。

来てゐたる、資良、「ここか」と入りつるほどに、四尺の御屏風の傍に

横様に給へば、「上臈かそこそは思ひつれ」と言ふめれば、「今宵

は歌の横座に侍ふなり」と言ふめり。端者三人、髪文に余りて姿をかし

きを、いみじう仕立てて、火桶ども出だし、まぜ菓子などして、杯は母

屋の簾の下よりみづから扇に据ゑてさし出づ。提子どもは端者ども。席

の簾は上げわたしたり。屋は降らざりつる雪、暮るるまに降る。題に

合ひて、夜のさまを、人々「かかる夜はたぐひあらじ」とをかしがる。

簾の前に灯ともして、人々寄りて、かこしする人も苦しげなるまで見ゆ。

人々の多かれば書かず。書きたる手ども、半らあれば、簾の内より差し

出づ。庭の小草雪をいたたく、

145 眺め出でて身にぞよそふる雪降れば枯れ行く草の上葉白むを  
(四七オ)

芦間の薄氷、

146 霜枯れの芦間の水の上氷下に流るる根こそ隠れね

炭竈、

147 富士の嶺の心地こそすれ冬来れば煙絶えせぬ真木の炭竈

題取らせたる人にてありしに、殿の御けしき悪しきころとて、慎みてえ

148 「ゆきて」に「雪」をこめる。

来で、頼家、  
四七ウ

148 炭竈にくゆらざりせば薄氷今日の芦間をゆきて見てまし

返し、

注 「まつば」、人名か。

149 冬寒み雪も氷も炭竈の煙に解くと思はましかば

歌のこと果てて、まつばに歌うたはせて、もろともうたひ遊ぶ。大人

どももおりて出づとて、経衡、「常陸相摸の、討たれて帰る心地こそす  
れ」と言ふを、人々笑ふめり。又の日、人よりも心に入れてをかしと思  
ひたりし、範永に、

150 「心の行き」に「雪」を懸ける。

150 待ち出でて心のゆきに芦の屋のあらはれにしも何ならぬかな

返し、範永、

151 前歌に同じ。

151 降り積る心のゆきにあらはれし宿のけしきはいつか忘れむ

経衡が言ひし言葉どもを、人々笑ひもてはやししかば、「ただにやは」

とて、

152 常陸なる横山の上にるし雲のいかで遙かに立ちかへりけむ

【六九】

「埋み火」といふ題を、



153 片敷きの袖やさすまじ埋み火の寢覚めの床に起こさざりせば

【40】

隆綱の中将、「月の明かき夜は、夜一夜なむ見る」とあるに、夜中ばかりに、初雪は降りながら、月の明かきがをかし。「同じ心にあらむや」と思ふに、「見るとありし、まことか」と試みむとて、

154 月をこそ珍しげなく思ふとも夜半の初雪降ると知らずや

返し、

155 雪ごとに待ちて過ぐさむ冬の夜には人も音せざりけり

【41】

同じ中将、「雪のいみじう降りたらむ折、広き野の雪御覽ぜよ。いつなりとも車参らせたらむに、「何事にこそ」とも、また「暇なく」とも仰

せられば、負くるにせむ」とあれば、「また降りたらむに、忘れて車賜はせずは負くるに」など、互みに言ひおきて後、あやにくに雪降らで、久しうありて里にあるに、いみじ、降りたるに、昼まで車もなし。「忘れにけり。負け給ひぬるよし聞こえむ」と思ふほどに、文あり。

156 明けて後積る雪にもいつしかと我がくるまを人や待つらむ

156 「くるま」は「来る間」に「車」。

157 「くるま」、前歌に同じ。

返し、

157 くるまをば心にかけて白雪の空言人に今日見つるかな

【三】

注 二字分空白。

馬の頭むまのかみ注 敦家、殿上人の参る 東面の御障子の絵に、馬の書かれたる

を、月の明かき夜、

158 五〇〇 絵なる馬の月の影にも見ゆるかな

とあれば、

159 くらからずこそ書きおきてけれ

【三】

津の守師家、入道の一品の宮の書かせ給へる万葉集の抄を得させ給ふと  
て、「これは、わがいみじきものと思ふものなり。形見にせよ」などあ  
りしを、亡くなりて、この冊子を見るに哀れなり。

160 なほざりに契と思ひし古への跡ぞまことに形見なりける

【七】

東三条殿におはしますに、八月十五夜、今宵にたがはず月の明かければ、  
出でて、女房達遊ぶに、人々のありくけしきを聞きて遣戸をたつるを、

159 「くらからず」、「暗からず」  
に「鞍」をこめる。

161 「白河」に「白河殿」の意をこめる。「あかきつき」は「明かき月」と「赤き杯」。

注 「と」衍か。

162 「いづみ」は「泉」と国名の「和泉」。

163 「紀の国」に「木」を懸ける。

寄りて覗けば、台盤に赤き杯ども据ゑたり。果てたるなめり、ものもし。  
少し退きて、資良あて、さらぬ顔にて、「今宵の月、白河殿いみじ  
からむ。見ばや」と言ふ。帰りて言ひやる、  
水を浅み白河ならで見ゆるかなあかきつきには残るものなく  
殿も聞かせ給ひて笑はせ給ふ。人々もと笑ふ。御前の歌の高名するま  
まに、「資良が台盤のあらはるこそわびしく」と言ふこそもの狂ほしけ  
れ。

【七五】

162 白良の浜はいづみなりけり  
御前の泉に白き小石を撒かせ給へるを、筑前の君、

とあれば、

163 紀の国に信田の森もありやせむ

【七六】

内裏の御祈りに、隆俊の中納言伊勢に下りて、「藤方といふ所の松」と  
て、五寸ばかりなる松どもの、老木になりて苔むしなどしたるを参らせ  
給へれば、

164 地名の「藤方」に「藤」を懸ける。

165 「あふぎ」、「扇」に「逢ふ」を懸ける。

167 「日かげ」は「日陰(葛)」に「日影」。

168 「日かげ」、前歌に同じ。

169 「やまゐ」は「山井」に「山麓」、「日かげ」は「日影」に「日陰(葛)」を懸ける。

170 前歌に同じ。

164 あらにはにも千代のしるしの見ゆるかな祈りかけける藤方の松

【七】

人の扇に、伊賀少将の手習したりし傍に、もの書きつけて、言ひかねたりし後、音もせで、五節に大師にて参りて言ひたる、

165 あふぎてふ名をば知らせでいかなればおぼつかなくてこころ隔つる

返し、

166 雲払ふ扇の風のにしにや乙女につけて聞き通ふらむ

出づる日、これより、

167 心をも今日は日かげにかくるかな同じ雲居を出づると思へば

返し、伊賀少将、

168 思ひ出でよ雲居のほかになりぬとも今日の日かげにかけつとならば

その暮にまかでたるに、つとめて、雪の所々降りたるに、筑前、

169 降りけれどやまゐに雪の積らぬは日かげさし出でしなごりなりけり

返し、

170 日かげさすやまゐの雪のむら消えは今日さへ着たる摺れる衣か

【七】

馬の頭敦家、松の葉乞ひたるに、「今日」といらへたるが、遅かりけれ

171 「まつ」は「松」に「待つ」を懸ける。

172 前歌に同じ。

171 千年とや頼めし人の契りけむまつはげにこそ久しかりけれ  
返し、

172 尋ねれど子の日のまつは折ならで引きつるほどぞ名にもたがはぬ

【十九】

七月一日、いと濃きもみちにつけて、蔵人の弁師賢、

173 「龍田姫」に「裁つ」を懸ける。

173 今日来れば秋のしるしに龍田姫もみちの錦織り染めてけり  
返し、

174 いつの間に深く染めけむ初秋のしるしばかりは見えぬ色かな  
五四之

【二十】

注 「つく花」、底本「つくり花」の「り」ミセケチ、不審。

注 「き」は「こそ」との係り結びで、「しか」とありたいところ。

安芸・小土佐、五月五日、結び花、つく花して、合はせ給ひしに、安芸  
結び花、小土佐造り花、右にて、方の人々みな分かれて挑み給ふ。花の  
さまどもいとをかし。その日になりて、泉の渡殿に誘ふ。橘・蓬・撫子  
など、おのおの心に挑み、装束きて、泉の水に影は映りつつる給へりし  
さまどもこそ、いとをかしうめでたかりき。方の人々、御歌どもいと多

かりき。上渡らせ給ひて二所御覽す。上をかしがらせ給ひて、その花ども女院に奉らせ給ふ。左の結び花の方人にて、蓬の結びたるに、

175 宿分かす軒にかくればいたづらに茂る蓬と見えぬ今日かな

右、造り花の方に、藤三位、橘に、

176 待たぬ夜も待つ夜も聞きつほとときす花橘の匂ふあたりは

## 【二】

殿上人、「梅の垣、卯の花の垣根、いづれまさる」と争ひしころ、女房

も思ひ思ひに寄りしに、梅の垣根に寄りたりしを、卯の花に寄りし政長

の少将、中將になるべかりしを、えならざりしころ言ひたる、「ものへ

まかりしに、梅の垣根の常よりも匂ひをかき、見れども、このほどは

いとど卯の花になむ」とて、

177 「う(卯)の花」に「憂」の意をこめる。

177 匂ふめる垣根の梅も何ならず世をうの花と思ふ身なれば返し、

178 前歌に同じ。

178 うの花と思ふ心をひきかへて木高き梅に今はならなむ

## 【三】

三月廿日ごろ、殿上人あまた局に来て、物語して、夜ふくるまであるに、

五六〇

ほととぎすの鳴けば、

179 待つ人に語り伝へむほととぎすまだ春ながら初音聞きつと

と言へば、師賢の弁、

180 珍しく鳴きて過ぐなるほととぎすいづこもこれや初音なるらむ

【三】

枯れたる葵を包みて、経方、小式部に、

181 「枯れ」に「離れ」を、「葵」に「逢ふ日」を懸ける。

181 枯れにける葵なれども人知れぬ心にはなほかけぬ間ぞなき  
「返しして」とあれば、  
五七〇

182 「枯る」に「離る」を、「葵草」に「逢ふ日」を懸ける。

182 ほどもなく枯ると見るにも葵草名をだにかけて聞かじとぞ思ふ

【四】

秋、月のつづけて明かきころ、殿上人々十余人ばかり、舟に乗りて遊び  
て、曉近く宮の御方に、経信の弁・蔵人の弁師賢・政長の少将など、  
琵琶弾き、笛吹き遊びて、「今は連歌奉れ」とあれば、さして、経方・  
頭の弁経信、あるは歌をよむ人にや、  
五七〇

183 次の付け句の結果、「夜ごと」に「節ごと」の意が加わる。

183 夜ごとにまさる秋の月影  
と言ふを、笛吹きて近くるたる政長に言ふを、誦じのしる、

184 笛の音を吹きしすませば呉竹の

【五】

殿上人々、夜一夜侍ひ明かして、暁に月のさし入りたれば、藏人の弁師

賢、

185 天の戸や押しあけ方になりぬらむ

とあれば、

185 「押しあけ方」は「押し開け」と「明け方」。

186 うちまで月の入りにけるかな

【六】

内の御前、「男好き者、女好き者の一になして、上に召し渡さむ」など  
たはぶれに仰せらるるころ、上の御局におはしますに、月の明かながら  
雪の降るに、夜ふけて御前見出だしたる、御前の有様いとをかし。「殿  
上にたれ寝であらむ。今宵寝ざらむ人を好き者には申してなさむ」など  
言ひて、式部の命婦など具して、見れば、みな人寝たり。殿上の壁のつ  
らに寝わたりたれば、

187 寝る人は壁とや雪を思ふらむみな白妙になべて見ゆれば

と言ふを、式部の命婦笑ふ。気配を聞きて起きてゐたる人あり。もとゆ

五九才



きなりけり。「蔵人の弁は」と問へば、「宿直所に寝て」と言へば、「も  
の言ひにやらばや」と命婦あれば、「かくぞ」とて、

188 むば玉の夜半の雪をば知らずとも寢覚めても見よ有明けの月  
返し、

189 現には姿はりやすると有明けの月と雪とを夢に見つるぞ  
五九〇

例はをかしうよむものを、まことに寝ぼけてなめり。使ひにありくもと  
ゆきもさ思ひたり。「男好き者に入れむと仰せられつるものを」など笑  
ふ。

【七】

夜ふくるまで時雨して、夜中ばかりより月のいと明かりしつとめて、  
讃岐守もとさだ、「今宵の月は御覧じつや」とあれば、

190 時雨るとて今宵の月を見ざりせばさやけきほどを今朝や聞かまし  
六〇オ

返し、

191 時雨せし雲間を見つつ月待ちし心の空に通ひけるかな

【八】

桜の盛りに、上の御局におはしまいに、御前の泉に、散りたる花をい

と多く入れさせ給へるを、

192 行く末も遙かにや見む桜花岩間を出づる水に宿して

女房達の御、あまたありき。御前にて殿上人あまた召して、鞠御覧する

六〇ウ

中に、隆綱・蔵人の弁師賢召して、「この花は見るや。歌奉れ」と仰せ  
言あれば、かしこまりて、立ちて、台盤所の方より、中将、

193 散る花の浮きて久しくなりぬれば春は水とそうれしかりけれ

返し、

194 散りぬれど澄む水からは桜花久しき世々に流れてぞ見む

六一オ

### 【へた】

式部の命婦、筑紫へ下るに、扇やるとて、

195 山の端は遠くなるとも大空の雲間の月をあふぎても見よ

返し、

196 思へただ雲間の月を眺めても心ぞ空になりはてぬべき

### 【40】

月の明かき夜、殿上の人々、「月御覧ぜよ」とて、「車陣に待ふ」と誘  
ひしかば、人々誘ひ聞こえて、いづこともなくありきしに、朱雀院の滝

195 「あふぎ(仰ぎ)ても」に「扇」  
をこめる。

197 「よる」は「夜」に「縊る」を懸ける。

198 「落ちくる」に「繰る」の意をこめる。

200 「二見の浦」に、箱の「蓋」と「身」を懸ける。

201 「二見の浦」は前歌に同じ。「増鏡」に「増す」の意をこめる。

203 「筑波川」は「人に心を付く・筑波川」。

のつらに車を立てたりしに、  
六一七

197 よるは見えけり滝の白糸

蔵人の弁師賢、

198 月影に落ちくる水の流れをば

199 流れ来る水に堰は見えねども心をのみもとどめつるかな

【九二】

鏡の箱に水を入れて、鏡のやうに氷らせたりしを見て、まだつとめて、

師賢の弁、

200 朝ごとに起きて見るらむ増鏡二見の浦の氷いかにぞ  
六二〇

返し、

201 起きて見る二見の浦の朝氷問ふにつけてぞ増鏡なる  
六二一

【九三】

筑前の君、常陸より、

202 霜枯れの後の冬草萎れ伏し跡だに見えぬ忘れ水かな

返し、

203 遙かなる人に心を筑波川深きに跡は見ゆるものかは

204 枕詞の「ちはやぶる」に「降る」を懸ける。

【九三】

賀茂に詣でたりしに、雪のいみじう降りしかば、車宿りに引き入れて見れば、もの旧りたる木ども、みな白みわたりたるに、見やれば、鳥居の方にいとことごとしうて頼家が詣づるに、供なるあやしげなる下衆して、「このわたりに住む尼の申す」とて、「言ひかけて来」とてやる、

204 老木にも花は咲きけりちはやぶる雪にぞ見ゆる神のしるしは

5

帰り参りて四五日ありて、大殿の、御前に語り申させ給ふ、「頼家が語り侍ふ。賀茂に一日参りて、いとをかしき事を侍ひしか」とて、歌を申させ給ふ。「をかし」と聞きてあたり。『これ、たれといふこといかで知らむ』と嘆き侍ふ「など申させ給ふを、」歌はいかが言ふ」と申させ給へば、「それを褒め侍ふ」と申させ給へば、「このわたりにあらば」と仰せらるれば、「われか、われか」とて。告げさせ給へりければ、返り事ありき。

【九四】

世中交はりて、哀れにいみじき事多かりしほどの事ども、われも人もあまたありしかど、なかなかなれば書かず。

六三ツ

15

10

205 「そる」は「剃る」と「逸る」の縣詞。

われ背きて後、大納言経長、金玉集借り給ふとてありし、  
205 今いまはとてそると聞ききしを鑄はたかの恋こひしきことに集しよや残のこれる  
返かへし、

206 世よの中なかを逸そるとすれども鵒はしたかの恋こひしきことぞ置餌おきゑなりける

またつれづれなりしかば書かき添そふる、

207 尋たづぬめる金こがねの玉たまは集しよならで衣ころもの裏うらにありと知しらずや  
六四才

返し、大納言、

208 「つみ」は「雀鵲」と「罪」。

208 とやがへるつみもやあると思おもふにもいかで衣ころもの玉たまを知しりけむ

【五】

隆経たかつね、美濃みのになりて、親おやの美濃みのの折見をりみける垂水たるみの水みを見て、  
209 古いにしへに垂水たるみの水みは菱かはらねど映うつれる影かげぞ年としを経へにける

とありけるを聞ききて、

210 年としを經へて垂水たるみの水みのうれしくや同おなじ流れの影かげを見みるらむ

【六】

山里ざとに移うつろひたりしに、典侍ないしのすけ、  
六四才

211 思おもひきや同おなじ道みちとは頼たのめどもこの世よはよそにならむものとは

212 「つゆ」は「露」に副詞の「つゆ」を懸ける。

返し、

212 先立ちしよそになるともかの岸の蓮の上はつゆも隔てじ

【九七】

「かのすみかいかにして」と哀れがらせ給へば、「見に」とて、人々おはして、歸りて、

213 住む人の心汲まれし山水を思ひ出づるも袖は濡れけり

返し、木の葉埋もれて水の見えねば、あるままのことを、  
六五才

214 散り敷ける木の葉の埋む山水を心汲むらむ人や払はむ

【九八】

雪の、道も見えず降る日、草の庵も残らず降り積めば、おろし籠めたるに、馬に乗りたる侍、降りまどはされて来たり。好きがましようこそおぼえしか。とり入れて見れば、

215 雪消えぬみ山隠れの鶯の初音は君ぞまづは聞くらむ

返し、

216 鶯を尋ぬと思へば雪消えぬみ山隠れは春ぞうれしき

【九九】

六五才

越後より、為仲、

217 さもこそは世をば背かめまことにや見し古里をかき絶えにける

【100】

「野辺の緑」といふ題を人の請ひしに、

218 朝ごとに緑の色の草深み過ぐる日数を野辺にてぞ知る

【101】

春駒、

219 野辺ごとに散れたる駒を主なくてたなびき籠むる春霞かな

【102】

山里に、何となき事どもを、人々のあれども、今日はましてよしなく、  
暇惜しくて、

六六才

220 涙のみかきもやられず目の前の昔語りになりぬと思へば

221 背きにし集にはあらず夢の世の思ひ知らるる言の葉なれば  
六六才